07-65
372

久里寿満寿

特49
610

緒言

クリスマス近けり、クリスマス祝さゞる可らず、既に是を祝すといふ、先づその由來、その歴史を知らざるべからず、吟ずるに祝詩なかるべからず、歌ふに祝歌なかるべからず、讀むに書册なかるべからず、而して今や此需要に應ずるもの少し、われら是を遺憾として此册子を著はし是を我國の家庭と親愛なる幼年とに獻ぐ、若し此册子にして家庭内の讀本たるを得ば著者の幸甚のみ。

城北巣鴨の里

著者志るす

明治二十八年十一月十六日

目次

聖母キリストを抱く圖……口繪
祝基督降誕詩……井上活泉氏
クリスマス祝歌……奥野昌綱氏
クリスマス……一
ベスレヘム……挿繪
十二月二十五日……二
クリスマス祝會……挿繪
サンタクロース……五
クリスマスの星……挿繪
クリスマス夢物語……七
東方の博士……挿繪
クリスマスの客……三五

基督降誕祭祠

井上活泉

瀰白風生拂黒雲。虎狼世界斂羊群。德星明指人間道。
牧者仰瞻天上軍。千里鶯啼因讃美。萬家雀躍是歡欣。
諸公若有莊嚴物。好發心胸獻聖君。

二

轂擊肩摩詣聖堂。堂中天樂響洋々。移山活石余能信。
攜月鼓花誰敢妨。美麗門前跳蹇躄。慈悲池畔聚七羊。
佳辰也似五旬節。異口同音喜欲狂。

三

呱々似笑鈍吟腸。陋室千秋玉有香。驚聽大羅天上曲。
喜看遍照夜中光。吾徒欲力唯傳道。名士應開他寶筐。
且晉見童松下戯。執鞭意氣自揚々。

クリスマスの歌

奥野昌綱

一あらたふとしや　としごとに
すくひぬしなる　キリストの
世にあれまし丶　日をおぼえ
よろづのたみは　いはふなり

二よろづのたみを　すくはんと
さかえをすて丶　よにくだり
人となりにし　神のみ子
エスキリストを　ほめうたへ

三たかきにいます　みかみには
みさかえあれな　あらがねの
つちはおだしく　をさまりて
人にはめぐみ　あれかしと

四あめのつはもの　あらはれて
みつかひたちと　もろともに
こゑをあはせて　うたひしを
ひつじかひらは　みなききけり

五われらもけふは　いとたかき
神のみさかえ　あらはれて
いやしきつちに　すむたみの
おだやかなるを　いはふなり

六めぐみをうけし　人はみな
神のみまへに　うちつどひ
うみたまはりし　をさな子を
すくひぬしとぞ　あがめける

七よろこびうたへ　みなうたへ
すくひぬしなる　キリストの
よにあれまし丶　けふこそは
よろこびうたふ　よき日なれ

クリスマス

クリスマス

もみぢ
みどり合作

年の若い方々に「一年中に何の日が一番樂しいですか」と尋ねると「無論クリスマスの日だ」と答へるで御座りませう、青年も斯う申します、老人もさう申します、世界の人々が聲を揃へて斯う申します、何故なれば此日は私共の救主が御降誕遊ばした日であるからですクリスマスはキリスト樣の御降誕遊ばした事を祝し奉る誠に喜ばしい、誠に愉快なる日であります、キリスト樣の御降誕遊ばした時には天の萬軍が聲を合せて歌ふたと申しますが、其後二千年の間、世界

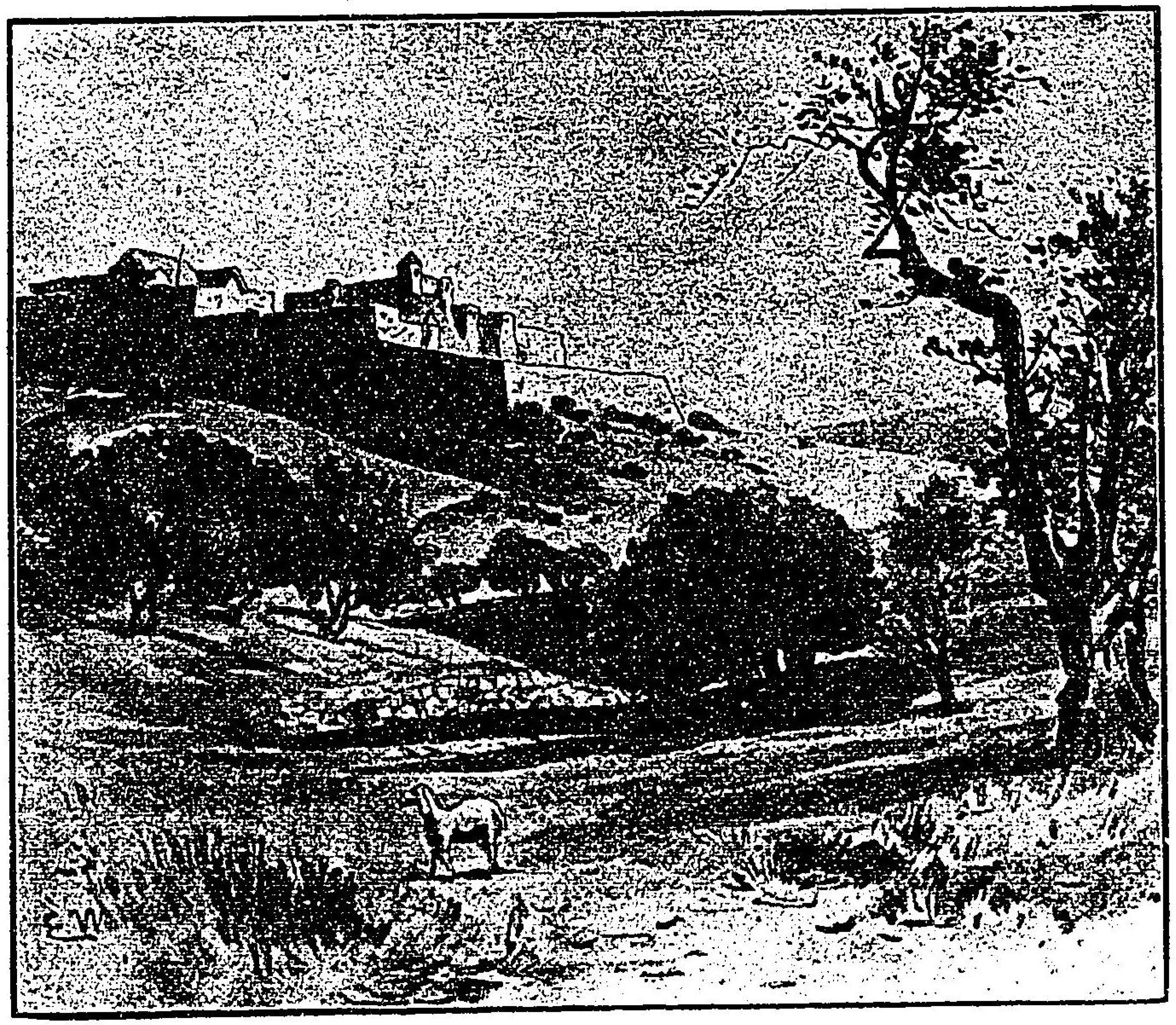
の人々がみな諸共に聲を合せて此日を祝ひ、此日を歌ひました。
あゝクリスマスの樂しい事、高い天も、廣い地も、飛ぶ鳥も、走る獸も、閃く星も、輝く日も、みな聲を合して此日を歌ふてをります、私共は諸君と共に天の使と共に喜ばしく歌ひませう。

天には榮光
地には平安
人には恩澤あれ

十二月二十五日

一般に十二月二十五日をクリスマスの祝日と定めてありまするが、一躰是は何の理由でせう。
（第一）古昔の人は、此世界は春創造られたものと考へ、且つは

ベスレヘム



ユダヤの地ベスレヘムよ爾はユダヤの郡中にて至小きものに非ず我イスラエルの民を牧ふべき君その中より出んとすればなり

（米五〇二 約七〇四十二）

夫イエスはヘロデ王の時ユダヤのベスレヘムに生れ給へり

（馬太二〇一）

三月二十五日は晝と夜との長さが同じい時であるから三月二十五日が世界創造の日であると考へました、であるからキリスト様がマリアの胎に御宿りなされたのも此日であると考へ、それから御誕生日までは九ヶ月要ると思ひましたから、十二月二十五日を降誕日と定めました。

（第二）紀元後三百五十餘年に、ある歴史の中に「主キリストは紀元第一年十二月二十五日の金曜日に生る」と誌してありました、十二月二十五日にクリスマスを祝するのは此理由かも知れません。併し東國の諸教會では一月五日又は一月六日を誕生日とし、埃及では一月六日を誕生日として祝してゐました。

（第三）羅馬の國では十二月二十五日の日は、一年中で日の最も短い日であると考へてゐました、且つ此日は太陽が高く北の方へ昇

クリスマス祝會

りますから新太陽日として、羅馬の都には燈火を點して此日を祝ひました、クリスマスは此る理由から十二月二十五日と思はれたのではあるまいかとも申します。

(第四)又此時羅馬の國ではペルシャの「ミトラ」宗を信じてをりましたが、此「ミトラ」宗では十二月二十五日を凱旋日と定めて祝してゐましたから、クリスマスの十二月二十五日と定められたのも或は此ういふ理由ではあるまいと、いふ人もあります。

兎に角、キリスト様の御誕生日は判然とは分りません、聖書にも書いてない、歴史には無論ない、この分らない所が却て此日の貴い、祝すべき所であると思ひます。

燭光會堂内に輝て白晝の如し幾十百の小天使は
喜色滿面に溢れて靜かに席にあり。
看よ〳〵花の如き二人の少女が睦まじく手を携
へて祝會に急ぐを看よ。樂しき歌は響くなり。
こよひはたのしクリスマス歌へ祝へ。

サンタクロース

昔しの昔、その昔、北の極なる寒國に一人の老翁住みにけり、頭の上には雪つもり、長き髯には霜しけり、年齢は幾才と尋ぬれば、百歳、千歳うちすぎて、經にし歳月數知らず、その名をサンタクロースと申しけり。

十二月二十五日には、老翁は肩に袋負ひ、カン〳〵太鼓に笙の笛、羽子板、手毬、菓子、密柑、あらゆる物を中に入れ、日本、朝鮮、支那、印度、イギリス、フランス、ロシヤ、ドイツ、イタリイ、スペイン、ポルトガル、北の極なる氷の山、アフリカにありと云ふ珊瑚の島、ありとあらゆる島々に、國々に、遠き近きのへだてなく、寒き熱きの差別なく、一夜の中にかけまはる、羽翼なくして鳥となり、

クリスマスの星

空に舞ひ、ひれもなくして水潜り、射る矢よりも猶速く、放てる彈丸にもいやまさり、をさなきちごがすや〳〵と母のかひなにねむるなる、傍に笛おき、太鼓おき、やさしきちごのねむるなる、めでたき小供の戲むるゝ、家に廻りてものをおき、小供の笑ふ顏を見て、ちごのよろこぶ聲きゝて喜ぶ事限りなし。

されば わらべも、年毎に此の日のくるを待ちかねつ、鶴の如くに首のばし、可愛き指を屆めつゝ、老翁の來るを詫びまてる、心の中ぞあどけなき、あゝ父樣、母上よ、昨日の夕わがもとにおもちやを呉れし老翁とはいづこに住むや聞かせてよ、其の名を聞かせ得させよと、わらべの問ふも面白き、ききな侍りぞわらはべよ、そなたを愛し育つる父と母とはそなたらが待ちに待ちつる老翁なれ、めぐみの深き、子供好きなる。

われら東の方にて其星を見たれば彼を拜せん爲に來れり

(馬太二〇二)

前に東の方にて見たりし星かれらに先ちて嬰兒の居所にいたり其上に止りぬ

(馬太二〇九)

クリスマス夢物語

(一)

まづ此の話は六助爺の死んだ事から始めなければなるまい、その六助爺は今から七年前に死んで仕舞つた、六助爺は確かに死んだ。六助爺が死んだ事は誰一人疑ふ者もない、六助爺の死骸は其友達の平兵衞爺が男二人に擔がせて、花も無ければ、葬送人一人も附かず、宛然犬か猫でも捨てる樣に青山の墓地の片隅に葬むつた事も確かである、併しこれは早や七年の昔の事だ。

(二)

元來この六助爺と平兵衞爺は古い友達であつた、六助が生きて居る

間は二人で商賣をして居つたが六助が死んでからは平兵衞爺一人で此店を持ち續けて、その店は今もまだ銀座の二丁目に殘つて居る。

（三）

十二月の廿四日の晩、北風がビユウ〳〵と吹いて、空は曇り勝の雪模樣、路往く人の顏や手、足、爪先などは凍つて仕舞ひ相な晩の事です。平兵衞爺は店前に揚々とスマして、鐵の火鉢を抱へ込んで居ります、火鉢の中には豆粒ばかりの火塊があります。平兵衞爺は五德の上から皺ばかりの手を擴げてさも大切相に蓋をして居ります、その側には番頭の久助が縮み上つて煙草盆の火で手を溫めて居りますが、その火といふたら、有るかないかの螢火です、平兵衞爺の火も小さいが、久助の火はまだ之れよりも小さいです、併しその螢火をば砂金の樣に大事がつて居ります、所が久助はこの平兵衞爺が猫の樣に威張反つてをる傍に、可愛相です、鼠の樣に小さくなつて居ります。

（四）

久助は餘りの寒さに堪え兼ねて

「旦那御免なせえ」

と平兵衞爺の手許にある炭箱に手を出すと

「こらッ、久助！」

「ヘイ……ヘイ……ヘイ……」

「何んだ贅澤な、まだ火があるではないか……不經濟な事しては困る……」

「ヘイ……ヘイ……ヘイ併し旦那餘り……」

「併しな久助考へて見ろ、炭一塊でも金だぞ……兎角奉公人は儉

約と云ふ事を知らんで困る、主人の爲を思はない樣な者はうちへは置けぬぞ」……

「へイ……へイ……へイ……」

（五）

一寸平兵衞爺の風躰を少し計り話して置ませう、此爺は豕の樣に太つて、頭は藥鑵の樣にはげて後の方に斂める程の髮が白髮交りに殘つて居る、面といふたら握拳を打き付けた樣で、惡く申せば榮螺面です、ですから平兵衞爺を見ると誰れでも、其の吝嗇な奴といふ事を知る事が出來ます、人は正直な者で今では誰一人も此家へ往くものがない、平兵衞爺に遇つても挨拶する者がない、「御機嫌克う」「御早う」などゝいふ人は一人もない、乞食の小供までが「吝嗇爺」といふて「一文やつて下さい」といはない！

（六）

「叔父さん御目出たう」

と云つて入つて來たのは十二三の男子です、これは平兵衞爺の甥です、すると平兵衞爺は

「何に？………お前の家へ千兩箱でも舞ひ込んでか」

「だれがそんな事を……冗談仰しやつちや困ります」

「何……にさ、お前が御目出たうと云ふからよ」

「ハヽヽヽそりや、叔父さん、あなたが間違ひなすつた、明日はクリスマスでせう」

「クリスマスが何故芽出度いかえ馬鹿々々しい、クリスマスが來れば、大三十日が來るのだ、大三十日は勘定する日じやないか、勘定日がすんだと思へば一つ年をとる、つまり青山へ御近くな

るのだ、おれが死ぬのが芽出度いのか、おれの壽命を縮めて、
それで芽出度いつて、この間抜野郎！」
罵りまするを甥は
「そりや叔父さん違つてるよ、クリスマスは一年にたつた一度かありませんよ。そして此の位樂しい日が一年中にありませうか、父さんや、母さんや、兄さんや、姉さんや、皆一緒に集つて御馳走を食つたり、面白い話をしたりして樂しむのではありませんか、僕は一年中クリスマス程樂しい日は無いと思ひます」
之を聞いて居りました久助は頻りに點頭いてをりましたが
「さうですとも〳〵クリスマスにや皆家で樂みます、坊樣の仰しやる通り……」

（七）

平兵衛爺は少し冷く笑ひまして
「フヽム、己れも、善い甥をもつたものだ、中々貴樣は理窟先生だぞ、學校から三文敎員に雇ひに來たらう、フム善ひ奴じや、えらい者だ、ハヽヽヽ」
「叔父さんさう冷やかさなくつても……」
「いやさ、冷やかすのじやない、貴樣はえらい者だよ、理窟先生だよもう用事はないかい」
「はい」
「ではもうお歸り……」
「叔父さんひどいねー僕お叔父さんが出て行けと仰やらないでも出て行きますが、ねー明日はクリスマスの事ですから、何卒私の内へ入しつて頂戴な、何にも御座りませんが」

「ウムおれは往かれねー」
「叔父さん困るねーそれは餘りだよ」
「何にあたり前だ、其譯曰つて聞かさう、まあ己れが貴樣の内で御馳走になる、それは此上もない結構な事さ、併し己はクリスマスは嫌いさ」
「叔父さん……」
「え丶五月蠅もう、御歸り」
「でも叔父さん」
「左樣なら」
「明日ねー」
「左樣なら」
「來て頂戴な」

「左樣なら」
「何卒ねー」
「左樣なら」
甥は呆氣に取られて歸りました。

（八）

その跡へ二人の紳士が入つて參りました。
「いらつしやい」
と、番頭久助は元氣よくいふた。
「いや是は失禮……何も買ひに來たのではありませんが、一寸御尋ね申します……あの平樣の御家はこちらですか」
「はい、左樣です……何か御用ですか」
「いえ、何も別段用と云ふのではありませんが、例年の通り貧乏

人の爲に金を集めますから、何卒御氣の毒ですが少々なりと、寄附を……」

「何ですつて、寄附？」

「はい、寒うなりますと、貧乏人に困るものが多くありまするから少々賑はしてやらうと存じて我々が……」

「へゝ！それは御親切に人の御世話まで……だが私は寄附などは出來ません、またそんな因縁も御座いませんし、只さへ思ふ樣に金が蓄らなくつて困つて居るのですもの、金出す御相談なぞは到底駄目です、それに貴殿方も中々の苦勞性ですな、盜賊が出來ますりや監獄と云ふものがありませう、又凍え死ぬものは自業自得で、餓れ死ぬものは懶惰だからです、なんの貴殿そんな金にならん損な骨を折つて堪りますものか、寄附金なぞはま

お眞平ですかな」

（九）

夜の十一時頃になりました、町々はもう步く人も殆んどない位です、平兵衞爺の家は隨分廣い家ですが、ランプはたつた一ツかとぼしてありません、それも上げ心と來てゐるから家の内はほの暗くつて、人の顏もよくは見えない位です、夜廻りが打つ拍木の音も間近に聞えまして、それは〳〵實に寂しい夜です。

（十）

久助は平兵衞の前に兩の手をついて

「旦那、どうぞ今晩から明日にかけて一日だけお暇を下さる事は出來ますまいか」

「ウム一日か……何うする」

「へい、家に歸りまして、一年一度のクリスマスを祝ひます……」

「それは中々面白からう、だがなノンキに樂ぶものは善からうが、暇やる己の身になつて見い……」

「ヘイ……ヘイ、それは私も存じてをりまするが、何卒明日一日丈……僅か一年に一度のクリスマスで御座りますから、何卒……」

「仕方がねー、歸るが宜からう、だが明後日の朝は暗い中からやつて來て明日の取り返しをせねばならんぞ」

「ヘイ……ヘイ……それは仰つしやらずとも」

（十一）

久助が歸りました後は平兵衛爺一人店前ヘツク子ンと座つて居りまして、何にか考へて居る風です。」夜は次第に更けまして森として車も通りませねば、下駄の音も致しませず、近處隣に起きて居る家とては、平兵衛爺と犬計りです。

「チヨッ、今晩の樣な延喜の惡い日があるものか、甥の奴が來て理窟を云ひやがる、寄附金と云ひ、久助のねだり……えゝこんな日が三日續かうもんなら堪らしねえ」

と小言言ひつゝ立ち上りましたが、庭の戸を閉めかけますと、平兵衛爺の頭の上をキヤッと鳴いて飛んだものがあつた、すると平兵衛爺はギヨッとして、後ろへ仆れやうと致しましたが「何に！」と空元氣を出して座に戻り、ランプを持て二階座敷へトントントン……

（十二）

寢部室の唐紙の側へ參りますと、奇妙にも家の隅々がグヮタ〳〵、キチ〳〵グヮラ〳〵と音がする、平兵衛爺は庭の戸を閉める時に、

膽を冷して居るまた其上に此の物音を聞いたから恐くなつてビリ〱震ひ上つた、これは何でも早やく部室に入つて寢るに限ると思ひまして、唐紙の鐶鈕を持たうと致しますと、これは何事！、唐紙の鐶鈕が六助の顏に變つて居る七年以前に確かに死んで仕舞たその六助爺の顏に！これはと後ろへドタンと仆れた。

逍の平兵衞爺も暫くは正氣が御座いませんでしたが漸う〱の事立ち上つて、ウムと力を入れて鐶鈕を睨み付けますと、南無三寶今度もやつぱり六助の顏でした確かり見詰めると、元の鐶鈕になつた、やれ嬉しやと平兵衞爺は震へながら雨戸や、障子などを閉めやうと思つて立ち上りましたが、足がガタ〱ブル〱震へて立つて居る事が出來ません、歩いてみたり、立つてみたり、匍匐てみたりしてやつとの事で閉める事は閉めたが、恐くて仕方がないから、青い氣を吹きながら、驅ける樣に前の寢部室へ飛び込んで、寢衣も被ずに着の身、着のまゝ蒲團を曳り出して頭から引つ被つて息もせずに寢てしまつた、寢たのはよかつたが、室の四隅がグワタ〱〱、天井の方からミシ〱〱、暫くしてグワタ〱〱ミシ〱〱と家全躰が鳴り初めた。

平兵衞爺は聞く度毎に震へ上つて、顏色は土の樣です、獨りで大溜息……コレハ〱〱

(十三)

グワタ〱がハタと止みました、室内は實に靜かです、凡ての物が寢てしまつた樣です、併し平兵衞爺は寢やうと思ひましても恐くつて寢られません、蒲團の下からニヨコツと首を差し出して見ますと、また蒲團生臭い風がヒユーと吹いて參りました、これはと思つて、また蒲團

の中へすつ込まうと致たしましたが「まてッ」と呼び掛ける聲がする。

(十四)

平兵衞爺はもう堪りません、「あれー助けて吳れッ」と叫びましたが誰れも聞えんと見えて來て吳れる人は御座りません、すると

「平さん、己れだ〳〵お前の友達の六助だ」

といふ聲がする平兵衞は驚いたの驚かないのつて、冷汗流して小さくなつてをりました、併し恐い者は見たい者とやらで靜かに頭を上げて見ると六助爺がをる、平兵衞爺は震へながら

「六助　お前は迷ふたな」

「ウム、迷う……た」

「なぜ迷ふた」

「さあ、其の物語をしやうと思ふて今晩こゝへやつて來たのだ、平さん丈夫か」

といひながらグワラ〳〵と長い太い鎖を振りますと平兵衞

「一躰其の長い鎖は何うしたのだい」

「ウムこれか、これには深いわけがある、己れが死んだのは何時か知つてるか」

「さうだねー確しか七年前だつけ、死んでから七年の間お前は一躰何を爲て居たのだ」

「己れか、ウム己れは旅をして居たのだ」

「旅を？」

「旅をして、苦しんで居たのだ、この通りだ見ろ、この鎖はな、己が犯した罪業の罰だ、世の中で悪い事を爲た爲に、これ此の

通り重い太い鎖を足にぶら下げて旅をしなけれやならん、あゝ已れは、苦しかつたぞ」

「でもお前は、娑婆に居た時にや、隨分貧乏人にものを呉れてもやつたし、少しも横着なぞはしなかつたし、酒などは一口も飲まなかつたじやないか、お前みた樣なものでさへ死んでから、そんなに苦勞しなけりやならないか」

「それは、平兵衛殿お前はまだ譯が明らん、少し位の善い事をするのは、そら人として當前の事で何んにも譽めるにや及ばん、これからまだ幾年も幾年も斯うして苦しまなけりやならないのだ……考へて見らう……」

「えゝ一躰それや本當かえ……」

「本當とも、本當とも、何して已が虚言を吐くものか、だから考へろよ、お前はまだ、已らあよりかひどい目に遇ふのだよ……いゝか……あゝ恐ろしい辛い事じやないか」

「それや本當か、六さん困つたものだなあ」

「まあ已のいふ事を聞いて呉れ、お前の樣な奴はな、千年立つても消える事のない火の中へぶつ込まれるのよ」

「では、已れもそう云ふ目に……」

「會うとも／＼、吃度會う、お前の樣な奴が會はねへで、誰れが會うものか」

（十五）

「こら何うせう、あゝ何うしたらよからう、六さん何か免れる工夫は無いか、免れる工夫は、無いか、六助さん無からうか、已れや、辛い、そんな苦しい目に會ひ度かあねえ……」

とベタ〳〵打つて部室中を狂人の樣に驅けづり回つて、泣きますと六助は

「何……………にそんなに泣かなくつても逃れる工夫がある」

「エヽあるつて、それは有り難い忝ない、己らあ身代皆な棒に振るから敎へて呉れんか」

「まあ少と落ち付て居な、すぐ敎へるから」

「それやありがてえ、その恩は吃度返すぜ」

「さあ、免れるにや、まあお前が一度幽靈に咬い付かれなくつちや駄目だらう」

「なんて、咬い付かれる――幽靈に、あゝそッ、そんな恐いこと……そんな事なしに、外に方法はあるまいか」

「まあ、さしあたりないね」

と云ひ殘して六助の幽靈は、障子の間から消えて、志まいました、平兵衞爺は今免れる工夫を聞き度くて堪りません、何うかして幽靈に咬い付かれる事なしに免れ度いと思ひましたから、六助の後に取り付かうと致しますと、障子の向側に久助の聲が聞へました、はてなと平兵衞爺は小頸を捻りまして、不思議だと障子の隙からそつと覗いて見ますと先きに暇呉れて歸らした久助の家です、何うした事ぞと息を殺して見て居ますと、久助の妻は夫が歸りましたから、急いで御馳走を作らへやうと臺所の方でいそ〳〵とやつて居ります、一番姉の子はお父さん御羽織をと脫しまして疊んで居る、一人の小さい男の子は久助の前へ凧や、樂獨や、帽子や、サーベルなんか澤山列べまして、これは隣の松爺さんが買つて呉れたのとか、これは田舍の伯母さんがお儀物だとか、これは日曜學校の先生からもらつ

たのだなどゝ列べ立てゝ、喜んで居りますと、一番末子の三ッになる子は膝に搔き上まして、久助の顋を撫で、一人笑ふて居ります。

（十六）

さて、御馳走が出來ますと、五人の家族がちやんと揃ひまして、食べ始めました、末子は久助の膝に抱かれまして、その嬉しさうな事、樂しさうな事は、中々他所では見られません、平兵爺衞は障子の影から之を覗て居ましたが、獨り志く〳〵と泣き始めました、己らあ、まあなぜこんなに惡い事をしたのだらう、妻が生きて居る間に他の人の樣に樂しうクリスマスをすればどんなに面白かつたらう、先きに甥が來た時にあれと一緒に至て夕飯を御馳走になつたら、どんなに嬉しかつたらう、あゝ久助の樣に今一度クリスマスを祝ふて見たい、今年のクリスマスはこれで濟むのだが、どうかして呼び戻して甥と一緒に樂しみたい、あゝ己れは本當に馬鹿だつた、本當に惡い事をしたと、獨で思ふて獨で殘念がつて居ります。

（十七）

平兵衞爺は障子の影で茫然として、泣いて居ましたが、これは奇怪し今まで向側にあつた久助の家は消えてしまつて、何處も、彼も眞闇になつてしまいました、そしてまた元の幽靈でも出さうにそれは〳〵凄い、實に寂しい所と變つた、平兵衞爺は又ビリ〳〵と震ひ始めます、今度は惡い事して殘念のと、恐はいのとが寄り合ひまして、平兵衞爺は自分の身躰を何うすれば善いのかさつぱり明りません、するとと後ろから平兵衞爺の髮を引つばる者が御座ります、平兵衞爺はドタンと後ろへひつくり轉りまして、其の氣も馬鹿な樣になりましたが、目も見えなくなりました、暫くして漸う〳〵の事正氣に返

りまして、目を明けて見ますと、それは〳〵實に青い西瓜の樣な面に長い髮を垂らしまして瘦せ衰へて火箸の樣な手を差し出して平兵衞爺を引摑まうとして居ります、平兵衞爺は飛び上つて逃げ出さうと致しますと「こら〳〵逃げる事はない、逃げても貴樣の生命は助からぬぞ」と申しまするので平兵衞爺は堪らなくなつて、直ぐ其處へ仆れました、すると其の幽靈は

「己れを知つてるか」

「イヤ存じませぬ」

「知らなけれや云ふて聽かさう、去年十二月に震へながら貴樣の門へ立つた乞食だ、其時貴樣が、己れを叩き出したらう、それから己れは貴樣の家を出で橋の上で其の夜飢え死んだのだ、今其の敵を取るから覺悟しろ」

「いや滅相な事……そんな覺は」

「だまれ、滅相も糸瓜もない、今咬い殺してやる」

「どうぞ、そればかりはお許し………」

「馬鹿を云へ」

「どうぞ……」

「えゝ、くどいわい」

「どうぞ、さう仰せられずと」

「ならん〳〵」

「どうぞ………」

「ならん」

「どうぞ」

「ならん」

「どうぞ」
「えゝ、ならんと曰ふに」
と飛び付て、平爺の頸筋へ咬ひ付きますと、平兵衞爺はキヤツト叫んで其場に仆れた。

* * * *

「ヤ……今のは夢であつたか……ほんとではなかつたか……：やれ〱安心した……やれ〱嬉しや……いや〱背にも腋の下にもヤ……これこの通の冷汗……でもまあ夢であつて結構じや……」
と平兵衞爺ノコ〱と夜具の中から首をつき出して見ますと、檐端に雀はチユー〱と囀つて、太陽は雨戸の隙から差し込んでをる。
イキナリ梯子段を飛びをりて門口へ往くと新聞が來てをる。

「オヤ今日は一體何日だえ」
と、取るものも取り敢えず、國民新聞を擴けて見ると『明治廿八年十二月二十五日』！
平兵衞爺は喜ぶの喜ばないのといふて、雀躍して喜んだ、
「イヤー今日がクリスマスであつたか……おれはまたクリスマスに遇ふことが出來るか……嬉しい〱樂のしい〱」

* * * * * * * * *

その日の十二時頃平兵衞爺の甥の門戸に立つて
「たのまう」
と大聲に呼ぶものがある
「どうれ」

といひつゝ平兵衛爺の甥が取次に來て、平兵衛爺を一目見て、飛上つて驚いた

「お父さん、お母さん叔父さんがいらしやつてよ………叔父さんが………」

平兵衛爺は奥へ入つて、今度は自分から

「イヤ、クリスマスはお目出度………」

＊　＊　＊　＊

其後平兵衛爺は生れ變つた樣な、よい人となつて、多くの人々から「いゝ叔父さん」といはれる樣になつたとさ。

（をはり）

東方の博士

博士たちエルサレムに來り曰けるはユダヤ人の王とて生れ給へる者は何處に在すやわれらは彼を拜せん爲に來れり……既に其室に入ければ嬰兒の其母マリアと偕に居を見ひれふして嬰兒を拜し寶の盒を開て黄金乳香沒藥など禮物を獻げたり

（馬太二〇一―十一）

クリスマスの客

「マア、嫌なお父さんだわ、何にを言つてゐらつしやるの？」

とは朝御飯のとき綾子が鶯の樣な愛らしい聲音で言つた言葉でありました。

「な……に、御飯を頂くから、神樣にお感謝を申してゐたのよ、綾ちやんはまだ神樣に御祈りすることを知らないかえ」

「でも、お父さんエス樣も御一緒に此處にいらしつて、御飯を食べて下さるの」

「さうさ」

「だつてエス樣があたいなどとは一緒に御飯を？」

「ウム、食べて下さるのだよ」

「本當に？」

「ウム本當さ、無理はない、お前はまだ年が幼くつて知るまいが、よく覺えてお居で、エス樣は私共が御飯食べる時も、道を歩行く時も、何時でも一緒に居らつしやるのだよ、そして何でも御願ひ申すことを聞て下さるのじや、だから一緒にいらしつて御飯食べて下さいつてば、エス樣は私共の處へ來て下さるのじや」

「本當に？」

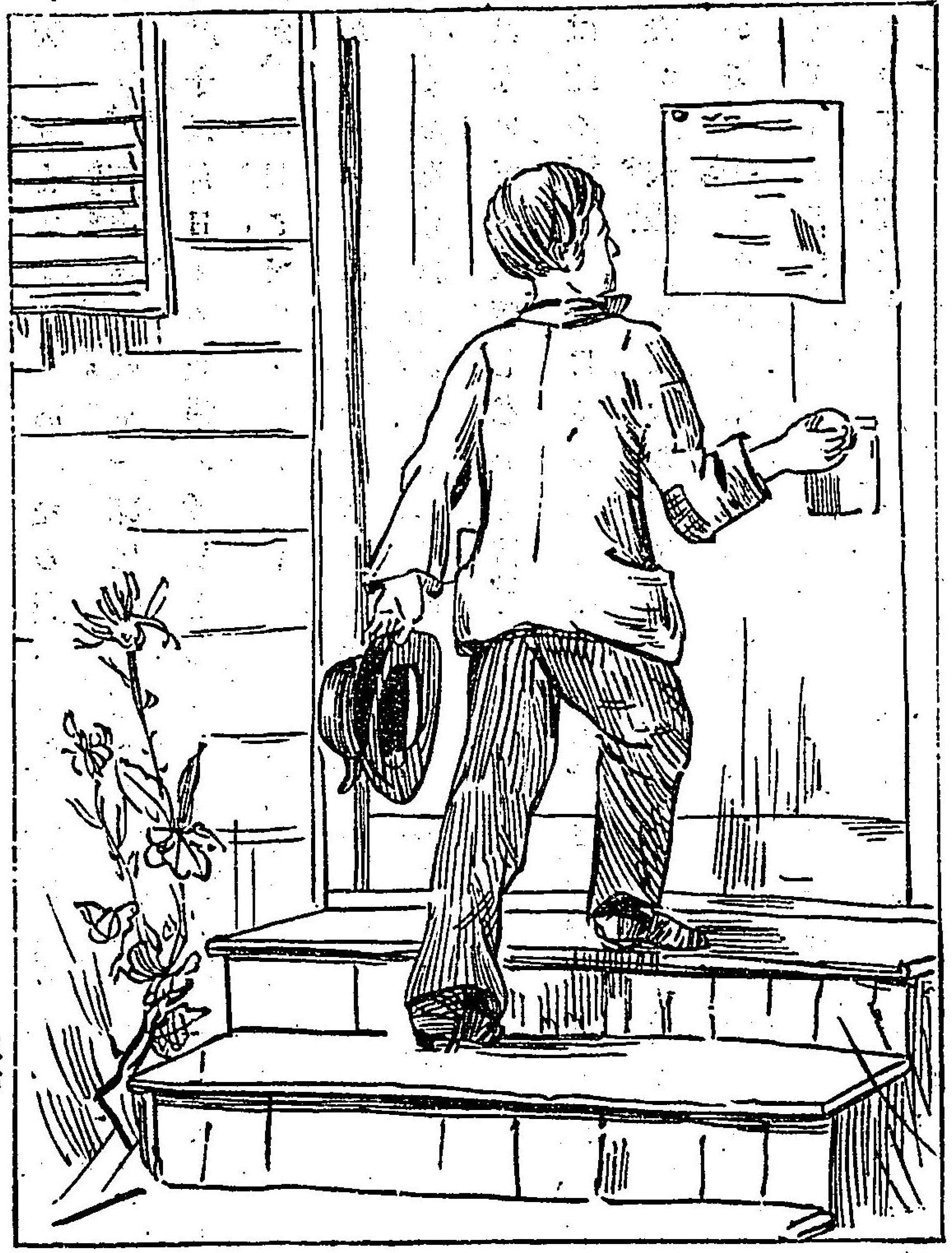
「本當とも〳〵。嘘言をお父樣がいふものか」

「それじや、あたいもお祈りしてから頂かうや」

「ウム、お祈しな乾度來て下さるらから」

それから、綾子は御飯の度毎に、お茶碗と、箸と、皿を一人前自分の席の隣に揃へまして、チヤンとお客樣がある樣に列べる、そして斯う祈ります。

クリスマスの客



「天に在ます神様、あなたの與へ給ふ、糧を頂く事をお感謝申します、何卒エス様も一緒に來て食べて下さいアーメン」

さて綾子は毎日々々此通り致しまして、今日こそはエス様が來て下さるか、明日こそはと思ひまして待つて居りました、併し何う曰ふものか、エス様は御出でになりません、綾子の方では朝御膳の時に來て下さらなければ晝御膳にはと思ふて、少つともお父さんの言葉を疑はないで又失望しないで待て居ました。

綾子は此の通り、毎日々々してゐるうち、はや十一月も暮れになりましたが、矢張エス様はお出になりません、でも綾子は少つとも疑はないで、例日の通り茶碗や、箸を揃へてお祈りを致しまして、明日は來て下さるだらう、明後日には屹度などゝ考へて居りました。

さうかうする間に十二月になりまして、クリスマスが參りました。

綾子はいそ〳〵と臺所の方でお母さんが晩の御飯の御馳走を作らへるのを手傳ふて居ります。

其日は丁度十二時頃から雪がボツ〳〵と降り初めましたので、綾子は他所へ行かないで家の内に閉籠つて居りました、それから夕かたになりましても止みませんで、三寸計りも積みました、さて六時頃になりまして夕御飯の時になりましたが冬ですから、御存知の通り眞暗になります、殊に此日は雪降ですから。

「綾ちやん、御飯だよ」

と御母さんが申しましたから、綾子は走つて參りまして。

「御母さん、今晩こそクリスマスだから、エス様が來て下さるだらうね！」

「アヽ、今晩こそ來て下さるだらうよ」

「それじや、御母さん、御馳走は一人前餘分に作らへて下さつて」
「チヤンと作らへてあるよ」
「それじや、これがエス樣のだから」
「アヽゞ、そこへ置きな、今ついで上げるから、お父さんをお呼び、モウ御飯を始めるから」
綾子は直ぐにお父さんの部室へいつてお父さんと一緒に參りまして、親子三人で愈御飯となりました。
「オイ、お前、今晩は綾ちやんに神樣にお感謝をしてもらをうね」
「へー、それが宜しいでせう」
「さあ、綾ちやん爲て頂戴、サー早く冷えない間に」
綾子は直ぐにお膝に手を置きまして、頭を下げてお祈りを致しました、綾子は心の底から祈りました、殊に「エス樣よ來り給へ」は一

番力を込て祈つたのです、それから御飯になりますと、お父さんは
「綾ちやん、今晩こそ、エス樣が來て下さるだらうよ」
話して居りますと、表の戸をトン〱と叩く音が致します、すると綾子はそりやエス樣じやと云ふので、表ての方へ飛び出しまして、戸を開けますと、これは又奇妙です、頭の髮は永らく散髮しないので蓬の樣に亂れ、顏は湯に入らないのですか汚れて鼠色をしてをる、着物と云つたらそれは〱襤褸で、海草の樣です、あゝ可愛相に所々の破れ目から躰が見えてをります、加之雪の上を洗足で步行いたものですからそれは實に目も當てられない程窶れてをる人が
「エヽ、私は旅人で御座りまする、御覽の通り、こう雪が降りましては、モウ步行けません、まだ夕飯も食べませんのでお腹が減つて仕方がありません、若し貴殿樣のお助けで止めて頂く事

が出來ませねば、モウ生命は御座りません、イヤモウ此の通り窶れまして、着物も此の通りで御座りますから步行かなくても到底死ぬる身で御座りまする……ヘイ……」

今にも死に相な聲で、寒さに慄えながら申しますと綾子は大變氣の毒に成つて參りました、そして旅人や、貧乏人を助けるのはエス樣の御心であると思ひましたから、此う申しました、

「何にも心配おしでないよ、お父さんやお母さんにさう云つて止めてもらつて上げるから、ねーおぢさん」

それから直ぐに走つて行きまして御父さんや、お母さんにその事を申しますと、兩親共に綾子の憐みの深い心を譽めまして、止める事になりました、綾子は直ぐに湯を汲みまして、旅人に足を洗はしそれから、御飯の所へ連れて參りましてエス樣のお茶碗や、皿で御飯を食べさせまして、色々な話を旅人と四人でいたして居りましたが面白いので知らず〳〵十一時まで話しました、それから綾子は御母さんに蒲團を出してもらいまして、旅人に褥を取つて上げて次の間に寢させました

* * * * *

夜が明けました、すると一番に綾子が起き上りまして、窓の戸を開けて見ますと、それは〳〵雪が樹の上、石の上、何處も、彼も一面に積んで居りまして、實に云はれない美い景色です、それに綾子は昨晩疲れ果てた旅人を助けて宿らせたりしたものですから、心がすが〳〵として何となう嬉しいです、綾子は旅人を起さうかと思ひましたが旅に疲れて居るだらうと思ひましたから止めましたが、又起

したくなりましてコッソリと旅人の部室に入りまして寝床を見ますと、これは不思議！居りません、便所かと思ひまして三十分計り待ちましたが歸りません、家中を尋ねましても居りません、表の方へ出て戸を見ましても戸は夜前の通り鎖鍵がちやんと掛つて居ります、實に不思議です、出た所もないに旅人は居ないのです、お父さんや、御母さんにも其の事を話しますと唯不思議不思議と云はるゝ計りです、が綾子は不圖心に思ひ付きまして大喜を致しました、それは、エス様が旅人の姿で御出でなすつたのだ、あゝ有難い、あたいのお祈りが聞かれたのだ。

《をはり》

明治二十八年十一月二十日印刷
明治二十八年十一月廿四日發行

定價六錢

發行者　東京市神田區鎌倉町三番地　高田乙三

印刷者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　吉岡巖八

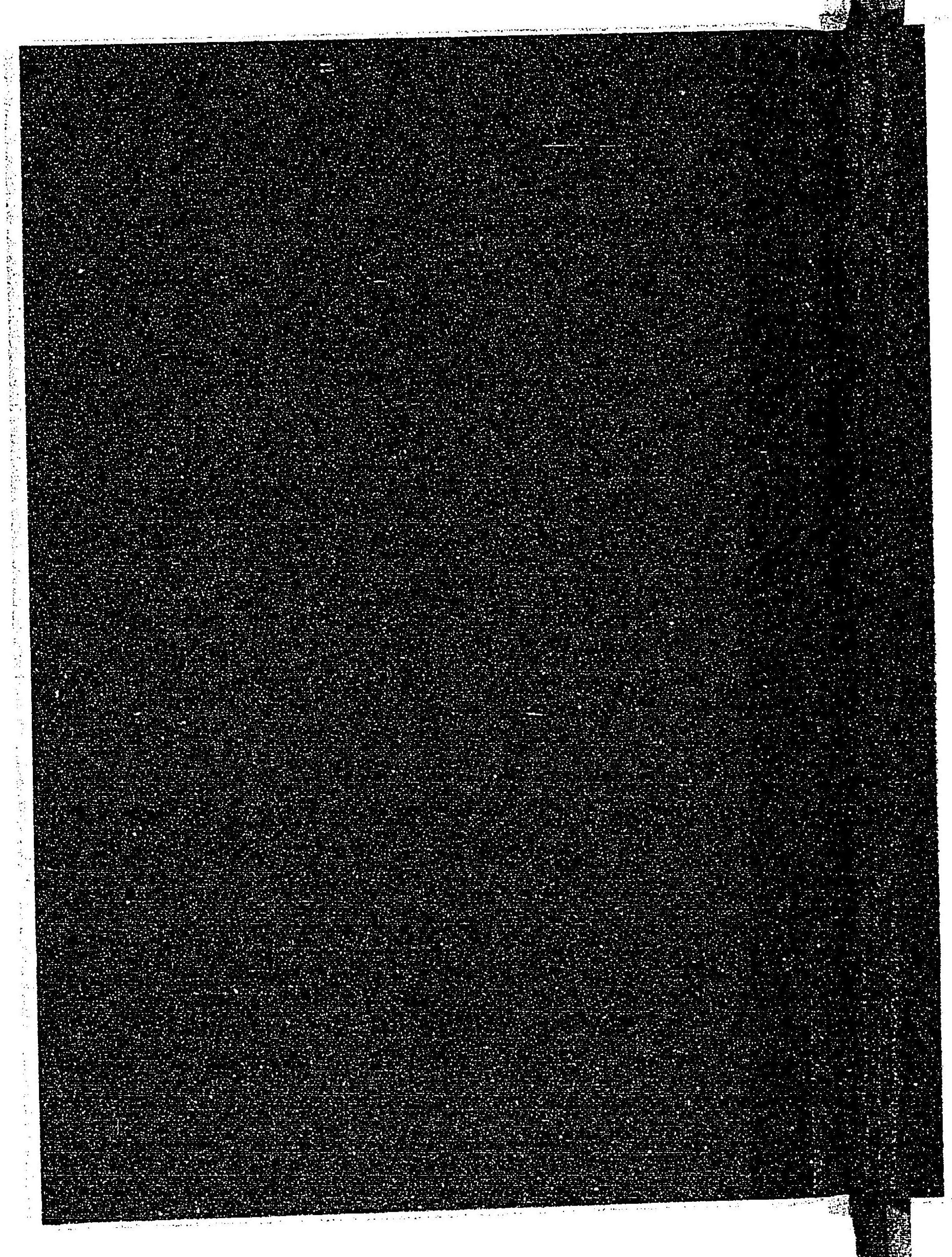
東京市京橋區銀座四丁目　メソヂスト出版舍

賣捌所　東京市京橋區出雲町　警醒社

印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍工場

版權所有

G-65



久里壽満壽

国立国会図書館

特

020602-000-0

特49-610

久里寿満寿

もみじ，みどり合作

M28

ABI-0417